土を掘り起こし、
玉川の丘に種をまく

耕す人

vol.3

「耕シ、蒔キ、刈リ、焚キ、飼ヒ、養ヒ、紡ギ、織リ、縫ヒ、建築シ、作製シ、印刷シ、鋳造シ、祈リ、売リ、買ヒ、計算スル……中ニマコトノ教育ガ体験サレルノダト思ヒマス」（小原國芳）

――野に鋤ふるう人びとを紹介します。

今月の耕す人は

生産農学科 フィールド実習（夏）

Tamagawa
"ROSAKU"
EDUCATION

食と農の理論と技術を学び、学内ラボと学内外の農場で実験・実習に取り組む農学部生産農学科。1年生の秋学期から学内農場で「フィールド実習A」を受講します。

耕耘機（こううんき）や鎌などの扱い方以降、路地とプランターでダイコン、コマツナなどの秋冬野菜の栽培を学びます。ここで培った知識と技術、経験を土台に、2年生の春学期以降「フィールド実習B」で春夏野菜の栽培に挑戦します。

昨年、肥塚信也教授と2、3年生はトウモロコシ栽培に取り組みました。果菜類の多くが虫媒花ですが、トウモロコシは風で受粉が進む風媒花です。この際、キセニアが生じないように注意して栽培することが重要です。キセニアとは、異なる品種の花粉によって、実の色や味が変化する現象です。

5月、あえてキセニア現象を誘発するために、黄色品種の列の間に、白品種の“クリスピーホワイト”を播種（はしゅ）。実がなり始めた7月上旬に獣害対策の電柵を約2時間かけ学生と張り、収穫を待ちます。これは、かつて収穫間際だった7月中旬、小動物による食害が勃発したからです。肥塚教授は「アライグマやタヌキは誰より実が甘くなる時期を知っている」と当時の大悲劇を語ります。

なんとか収穫できた2種とキセニアが生じて実に白と黄色が混ざったトウモロコシを手に、圃場脇の農場教室で講義が行われました。講義の後には教材のトウモロコシをレンジで温め、汗を流した者の特権である採れたての味覚を学生と味わいました。

実習中の動画がご覧になれます

イラスト＝阿部伸二　取材・文＝髙部清美（本誌）